

あまごい ひゃっこくおど 雨乞いの百石踊り (上本庄)

駒宇佐八幡神社では、毎年十一月二十三日に百石踊りを奉納しています。きらびやかな幡や笠幕を立て、締太鼓を手にした子どもたちが踊ります。

百石踊りの名は、一回踊ると百石の米や穀物と同じくらいの費用が必要なことから名付けられたとされています。

この踊りが五〇〇年以上に渡って伝えられているのは、あるお話が伝えられているのです。

時は文龜三年(一五〇三)。一人のお坊さんが大音所にある常楽寺(今はありません)に立ち寄り、滞在していました。お坊さんの名前を元信と言います。

その年の夏はまったく雨が降らず、草木は枯れ、鳥や動物も死んでいくほどのたいへんな日照りが続きました。村人たちは、神さまや仏さまにお祈りしたり、お願いしたりしましたが、まったく雨が降る様子がありませんでした。

「雲が黄色く見える時はひどい日照りが続き、何十日経っても雨は降らないでしょう。」

と、ある占い師が言いました。みんなは不安になりました。これを聞いた元信は、どうすれば人々を救うことができるのか、悩み考えました。

「この先も長く雨が降らなければ、多くの人が飢え死にしてしまう。村の人たちがこんなに祈っているのに、雨が降らないのは、人々の祈る心が神仏に届いていないのではないか。心をこめて、正しく祈れば、神も仏も必ず応えてくれるはずだ。こんな時こそ、僧として、正しい祈りを知っている私が人々の役に立たなければ……。」

元信はすぐに駒宇佐八幡神社の杜にこもり、七日七夜のお祈りをはじめました。

二日目の夜中のことです。元信は、うつらうつらと眠気を覚え、ついには、その場で眠りこんでしまいました。すると夢の中に、多くの小男、小女が現れ、元信の周りを取り囲んだのです。

小男は小太鼓を打ち鳴らし始めました。小女は先に五色の御幣がついた長い杖を持ち、日の丸扇を片手にたずさえています。そして、太鼓の音に合わせておもしろおかしく歌い囃して、踊っているではありませんか。どうやら雨乞いの踊りのようです。



その雨乞い踊りの様子を祭神である八幡大神が社の扉を開けて、楽しげに笑って見ておられます。すると風が吹き、雲がわき起こり、大小の御幣が降ってきたのです。

元信が夢から覚めました。すると、言葉に表せないくらい美しい色の大小の蛇が現れ、元信の周りを取り巻いていたのです。

それから、庭に出た大小の蛇は近くの大きな古い杉の木に、次々と登っていきました。

するとどうでしょう。元信の顔にぼつぼつと雨が落ちてきたのです。

元信は願いが神に通じたたと感謝の気持ちでいっぱいになり、涙を流しました。そして、今まで以上にお祈りをしました。

しかし、そのうち雨は止み、空には雲一つなくなりました。雨は少ししか降らなかったのです。

ところが、元信は気を落とすどころか、益々強く、一心にお祈りを続けたのです。

元信の心が通じたのでしよう。また、ぼつぼつと雨が降り出したのです。祈り続ける元信に合わせるかのように雨は激しくなり、三日間も降り続いたのです。川もため池も

水があふれるほどになりました。元信は神に感謝し、人々が救われたことを心から喜びました。

この年の日照りは実に百七日も続き、かつてないほどの大干ばつだったのです。村人たちは元信を神か仏のように尊敬し、感謝したということです。

この年駒宇佐八幡神社では、元信の夢に出てきた雨乞い踊りの様子を再現し、雨乞い祈願の願解き踊りとして奉納しました。元信を中心に、八幡神社の境内で老若男女がそろって七日七夜踊り、雨を喜ぶ祭りにしたのです。

やがて元信は修行のために旅立ちましたが、元信への感謝の気持ちはみな心のに残りました。

それ以来雨が降らない年には、村をあげて雨乞いの祈願をしました。そして、必ずこの百石踊りを踊り、雨乞いをしたということです。